

論文

高度経済成長期における農山村地域出身の
中学生に関する生活史研究¹

— 中学校時代の思い出の「自由記述」の分析を通して —

小 針 誠

現代社会学部・現代こども学科

Abstract

In this study, life histories of graduates of junior high schools in rural districts in Nagano Prefecture from the 1950s to the early 1970s, have been revealed based on a questionnaire (n=178) in which they have freely answered about memories of those days.

The following facts have been shown through a series of the analyses.

First, they have happy memories of their school lives, especially playing with friends, school events and club activities, while most of their bitter memories are focused on family financial hardships. Second, school played the important role of protecting and sheltering children from various troubles in their family lives. Third, the contents of their memories are hugely different from, for example, from one generation to another. The graduates of 1955, who spent their junior-high days in the era of low advancement rate in high schools, have bitter memories of giving up going to high school or helping out around the house. On the other hand, these are not true for those who graduated in 1970, the time of a mature Japanese society after experiencing high economic growth.

Key words: life history, junior high school students, high economic growth

1. はじめに

(1) 研究の目的

本研究の目的は、1950年代～70年代初頭にかけての高度経済成長期に、長野県のある農山村地域（K町・N村）²の中学校を卒業した者を対象とした質問紙調査をもとに、自由回答（フリーアンサー）形式で記入された中学生時

代の思い出の「作品化」³を通して、彼ら・彼女たちの中学生当時の個人史や取り巻く社会状況を生活史（ライフヒストリー）として明らかにすることにある。

本研究における「生活史」とは、対象者の中学校時代の「思い出」の記述内容を通して、当時の農山村地域の時代状況や実態とともに、中学卒業から40～50年経たことで、〈いま・ここ〉から振り返った過去の社会状況に対する見方や考え方などの主観的な要素も含めて、分析・考察を行うものである。それと同時に、個人のパースペクティブ、たとえば価値観、状況規定、社会過程の知識、体験を通じて得たルー

A Historical Study on the Lives of Junior High School Students from Rural Districts in the Era of High Economic Growth: Based on a Questionnaire in which They Have Freely Answered about Memories of those Days

ルなどと、当事者たちの生活世界の現実（年齢、出身階層、性別、地域社会や時代の状況など）とを重ね合わせることで、分析・考察を志向するものである。

本研究における時代対象である高度（経済）成長期とは、一般には、朝鮮戦争（1950年～1953年）を契機にした特需景気から1970年代前半のオイルショックまでの時期における、重化学工業を中心とした産業構造の転換と国民所得倍増計画に代表される国家主導の経済発展と、それに伴って近代合理的な生活様式が大衆化し、「物質的な豊かさ」を享受した時期であるとされる（正村 1988 香西 2001）。

その一方で、それと引き換えに、「心の貧しさ」を甘受せざるを得ず、高度経済成長期を、様々な社会病理の要因・背景として見る向きもある⁴。こうした否定的な評価は、経済的な豊かさや贅沢さを追い求めることに反省を促し、行き過ぎた近代社会のあり方を批判・警告する点で共通している。

あるいは、国民所得倍増計画とその一環として導入された農業基本法（1961年）などの諸策も空しく、地域間（都市と地方）あるいは農工間の所得格差はそれ以前に比べてさらに拡大した。地方の農山村では厳しい経済状況が続き、豊かな都市へと移住（向都離村）した結果、過疎の問題が新たに顕在化することになった（吉原 2004）。

子どもや教育の問題に目を転じると、都市部では高校・大学進学率が軒並み上昇し、多くの子どもたちが高校・大学への進学機会を享受する「教育の大衆化」の一方で、地方の高校進学率は停滞し、都市部との地域間格差は拡大するなか、地方の農山漁村の新規中学校卒業生、特に農家の二三男は、大都市圏に移動・就職し、高度経済成長を底辺で支えた（加瀬 1997）。

このように、高度経済成長における「大きな政府」（福祉国家）は、諸策を尽くしたにも関わらず、地域間または社会階層間の格差や不平等の問題を十分に解決し得たわけではなかった。そうした一連の「政府の失敗」が後の「小さな

政府」（新自由主義国家）の嚆矢になったことは改めて指摘するまでもないだろう（金子 1990）⁵。

本研究の対象者は、高度経済成長期における農山村地域の中学校を卒業した者であり、いわゆる「団塊の世代」（1947～49年生）を約10年ずつ前後して含む世代である。彼ら・彼女たちがありのままに回顧・記述した中学校時代の思い出を「生の声」として拾い上げ、分析・考察し、当時の地方の農山村地域の実態を明らかにすることは、日本の現代史・戦後史研究上、意義のあることだと思われる。「失われた10年」と呼ばれる昨今、高度経済成長期を「黄金時代」「幸せな時代」としてポジティブに回顧する言説が散見されるなかで（たとえば『文藝春秋』2003年9月号など）、それとは反する地方の農山村の実態をそこに暮らす生活者の視点からクリティカルに浮かび上がらせることができるのである。

また、本研究で採用する自由記述の分析は社会科学における研究方法の新たな開拓にもつながるものと考えられる。

村瀬ほか（1995）によれば、自由回答の分析の目的は、大きく2つに分類されるという。第1の目的は「探索的分析」と呼ばれるものである。これは、調査実施者の側では事前に予想し得なかった回答の発見を目的とした問題発見型の分析であり、選択肢を事前に設定することによる回答の偏りを避けようとする場合にも有効である。第2の目的は「確証的分析」と呼ばれるものである。これは、あらかじめ設定されたカテゴリーに基づいて、得られた回答の分布や変数間の構造などについて、問題を確認するためのものである。頻度の多い回答を分類・コード化するなどして、属性別に分析する方法などもこれに含まれる。

本研究において抽出・分析されたエピソードは、事例分析としての「探索的分析」のみならず、標準化・定量化された分析を志向するうえで、一定数の回答者を確保した強みを生かし、自由記述の内容を、年齢（卒業年次）・性別・

中学校時代の成績（「よいほうだった」から「あまりよいとはいえない」の四段階の自己申告による回答）・中学校卒業後の進路などの変数と関連付けて説明することによって、「確証的分析」も可能になるのである。本研究は、この「確証的分析」を行おうとする数少ない研究であり、質問紙調査の自由回答の分析についての新たな方法論の可能性を提起しようとするものである。

ただし、これら自由回答の内容は、飽くまで回答者が中学校時代の思い出を主観的に記述したものであり、調査対象者の中学校時代の生活に関する「社会的事実」ではない、いわゆる「ドキュメント」としての資料である。「ドキュメント」資料を用いた古典的研究である Thomas, W. I. & Znaniecki, F (1918-1920: 1983 訳) では、①手紙、②自伝（生活史）、③新聞記事、④裁判記録、⑤社会機関による記録の5種類の資料が利用されている。

それらのドキュメントは、「個人の経験を説明したものであり、それによって人間行為者として、また社会生活の参加者としての個人の行為が明確になる」という意味で、ヒューマン・ドキュメントとも呼ばれる (Blumer, H 1939 = 1983 訳: 175 頁)。本研究におけるヒューマン・ドキュメントは、高度経済成長期の農山村地域の学校・家庭・地域社会の諸特性とともに、そこに「生活者」として生きた子どもたちの学校・家庭・社会に対する態度・価値・構えなど主観的側面を浮かび上がらせることのできる格好の資料である。

以上のように、中学生当時の思い出についての自由記述回答による資料は、主観も多分に含まれるために、直接的には歴史的事実を表象するものではないかもしれない。しかしながら、同じ地方の農山村地域に育った個々人の主観を含むヒューマン・ドキュメントをデータソースに生かすことは、新たな歴史像の構築を志向するうえで大きな強みであり、既存の歴史像の更新に迫る力をもつものになると思われる。

(2) 調査の方法

本研究は、2002年7月から10月にかけて行われた質問紙調査「農山村出身者の地域間移動と定住についての調査」（研究代表者・岡崎友典放送大学助教授）のデータに基づくものである。調査対象者は、1955（昭和30）年、60（昭和35）年、65（昭和40）年、70（昭和45）年に長野県のK町立中学校2校ならびにN村立中学校1校の計3校を卒業した者824名である。

本調査は、中学校卒業後の進路（就職・進学・家居）をもとに、同窓会名簿、町人会名簿、電話帳、また地元居住の同級生への聞き取り調査を通じて、現在の連絡先が判明した728名について調査票を郵送し、178通（有効回答率24.5%）の有効回答を得た。

調査項目は基本的な属性（フェイスシート）のほか、家族・職業・資格・居住地移動、生活満足度、地域イメージ、余暇活動、生涯学習、中学校時代の思い出などで構成されている。

本研究はそれら質問項目のなかでも自由記述（フリーアンサー）方式による中学校時代の思い出を分析の対象とする。調査対象者には、中学校時代の思い出に関して、「楽しかった思い出」「苦しかった思い出」「悲しかった思い出」「嫌だった思い出」の4つに分類して、それぞれありのまま思うままを記述してもらった。

調査対象者の基本的な属性は〔表1〕に示した通りである。

まず、性別による偏りはほとんどないものの、年齢層は現住所の判明数の偏りから必ずしも均等に分布していない。出身地については、K町出身者が圧倒的に多い。そもそもN村はK町に比べ人口が少なく、そのために生じたサンプル数の偏りである。

現在の居住地についても、就学・就職あるいは結婚などの理由で、長野県外に移住した者が半数弱を占め⁶、ついでK町・N村以外の長野県内の在住者である。最も少ないのが地元であるK町・N村在住者である。このサンプルの偏りは、今回の調査対象者が中学校を卒業し、地元を離れて県外の土地で就職・就学あるいは

表1 対象者の基本的属性・n=178

性別	
男	51.1%
女	48.9%
年齢層（括弧内）は中学卒業年度	
1940年生（55年卒）	34.3%
1945年生（60年卒）	23.0%
1950年生（65年生）	30.3%
1955年生（70年卒）	12.4%
出身地	
K町	82.0%
N村	18.0%
現在の居住地	
K町	22.5%
N村	3.4%
長野県内	28.7%
長野県外	45.5%

結婚した者がいるように、1950～70年代のK町・N村の急激な人口流出によるところが大きいと思われる。

なお、今回分析の対象とする中学校時代の思い出の自由記述回答者についても、調査票の回答者178名中108名が記述していたが、回答者の属性には大きな偏りが見られた。高校進学率を指標に検討すると、1955年から1970年におけるK町・N村全体の高校進学率が52.7%に対して、調査票の返信者のそれは62.5%、さらに中学校時代の思い出に関する自由記述回答者

のそれは71.6%であった⁷。回答者の属性による偏りを抱えているという限界に留意しつつ、以下の分析と考察を行った。

2. 「思い出」内容の分類

108名の記述したエピソードの内容をおおまかに確認しておこう。4種類の思い出に対して、複数記述した者もいるため、抽出されたエピソードの総数は264であった〔表2〕⁸。

「楽しかった思い出」欄に記入されたエピソードが103（39.0%）に対して、「苦しかった思い出」が63（23.9%）、「嫌だった思い出」が53（20.1%）、「悲しかった思い出」が43（16.3%）と、ポジティブな思い出（楽）に比べて、ネガティブな思い出（苦・嫌・悲）のほうが多かった。

また、思い出の対象に注目すると、最も多く挙げられていたのが中学校在学当時の「学校生活」に関する思い出であった（185エピソード・70.1%）。学校に関する思い出はテーマ別に学業・授業・進学問題、友人・遊び、学校行事、教師-生徒関係、通学の5つに分類された。

ついで、「家族」における思い出を挙げる声が多かった（58エピソード・22.0%）。家族に関する思い出は家族・親族、家族の経済的状況、家事手伝い、その他の4つに分類された。

このほか「地域社会」での生活に関わる思い

表2 中学校時代の思い出 264エピソード分類

	計		楽	苦	悲	嫌	計
学校	185	学業・授業・進学問題	4	8	7	13	32
		友人・遊び	40	1	6	4	51
		学校行事・部活動・生徒会	40	14	5	6	65
		教師-生徒関係	6	1	1	6	14
		通学	1	14	3	5	23
家庭	58	家族・親族	2	1	14	2	19
		家族の経済的状況	0	11	4	2	17
		家事手伝い	0	9	1	11	21
		その他	0	0	0	1	1
地域社会	12		9	2	0	1	12
自分自身	7		0	3	2	2	7
その他	2		0	0	0	0	2
計	264		102	64	43	53	264

出が12エピソード、中学生当時の「自分自身」について挙げられた回答が7エピソードを数えた。ただし、これらについてはエピソードの数自体が少ないため小分類は行っていない。

以下、本研究で引用する「思い出」は、特に断りのない限り、回答者の記述した内容そのままである。また、自由記述の引用は、それとわかるように、ゴシック体で示した。なお、具体的な個人名や地名等については一部匿名で記述したところもある。

3. 「学校に関する思い出」の内容分析

中学校時代の思い出として最も挙げる声が多かった「学校生活」に関する回答にはどのような内容または傾向が見られるのだろうか。学校生活に関する回答をキーワード・問題対象別にわけ、そのうえでどのような種類の思い出であったか（楽しかった思い出、苦しかった思い出、悲しかった思い出、嫌だった思い出）を明らかにしよう。

(1) 学業・授業・進学問題

まず、対象としての「学業・授業・進学問題」については、全般的に「楽しい思い出」(4エピソード)に比べて、「苦しかった」(8エピソード)「悲しかった」(7エピソード)「嫌だった」(13エピソード)などネガティブな思い出として回答する傾向が見られた。

ポジティブな思い出に代表されるのは以下の3例に見るとおりである。

- ・希望の高校に入れたり、友達とも好い関係だった。〔55年卒・女〕
- ・新しい学問的な勉強が大変でもあり楽しかった。〔55年卒・女〕

これらは、いずれも55年卒の女性で、成績がよく、中学校卒業後に進学校に進学している点で共通している。それ以外には「**体育の時間**」〔65年・女〕のように得意な科目を回答した者や「**毎日が自然と楽しかった。学習、部活両面**」〔70年卒・男〕が確認されるのみである。なお、この両者も「中学校時代の成績がよかつ

た」点で共通している。

他方、ネガティブな思い出として語られている回答の多くが高校進学の問題（高校に進学できなかったこと）にほぼ集中している。その幾つかを挙げてみよう。

- ・高校に行きたかったが妹弟がいたので金銭の為に行けず。〔55年卒・女〕
- ・高校に進学できなかったこと 経済的に。〔55年卒・男〕
- ・高校進学時、母より、男の子の教育を優先したいから洋裁学校に行くように言われた。〔55年卒・女〕
- ・経済的理由で高校進学が出来ず単身上京し、職業訓練校で生活していたこと。〔55年卒・男〕
- ・進学できなかった。成績が良い人も進学できなかった人も多くいた。〔60年卒・男〕
- ・高校入試に落ちた人がいたこと。中学で就職する人を見送った時の別れ。〔65年卒・女〕
- ・高校受験を断念したこと。〔65年卒・男〕

調査対象者の中学校卒業時期は、ちょうど日本が高度経済成長期と重なり合い、大都市圏を中心に高校進学率が全国的に上昇していく一方で、K町・N村のように経済的に厳しい農山村地域の若者の多くは、当時「金の卵」と呼ばれた若年労働者として、中学卒業後に就職を余儀なくされた。そのなかには、高校に進学できるだけの学力がありながら、家庭の事情、特に経済的理由により、進学のを剥奪された者が相当数存在した。

そうした時代背景のもとで、特に経済的な理由で進学できなかった者は、当時の苦しい・悲しい・嫌な思い出として吐露している。なかでも本調査対象者の中で最も高齢の55年の卒業生ほど進学問題についてネガティブな思い出を記述している。その一方で、70年卒業生になると、高校進学についてのネガティブな思い出はまったく記述されていない。70年卒業生のうち1名だけが「**成績が思うように上がらなくなったこと**」〔70年卒・男〕と学業・進学問題

に関するネガティブな思い出を記述しているものの、彼は中学校卒業後に進学校に進学している。

K町・N村の高校進学率は、60年卒こそ一時的な上昇が見られたものの、全国のそれと大きな格差があった〔表3〕。しかし、65年卒の50.6%から70年卒の76.3%という大幅な上昇の過程で、全国の進学率との格差が-21.7%（65年卒）から-8.7%（70年卒）までに縮小した。高校進学率の上昇は進学が機会がそれ以前に比べて拡大したことを意味し、地方・農山村地域における進学問題の改善が卒業年次別の思い出の内容の相違となって表れているものと推察される。

表3 K町・N村の中学生の高校進学率（%）

	K町・N村 (A)	全国値 (B)	(A)-(B)
55年卒	37.4	51.3	-13.9
60年卒	55.5	62.3	-6.8
65年卒	50.6	72.3	-21.7
70年卒	76.3	85.0	-8.7

*K町・N村についてはK町・N村教委提供資料、全国値については文部省『学校基本調査』を参考にした。

(2) 友人・遊び

「友人・遊び」に分類されたエピソードは総計51を数えた。そのうち「楽しかった思い出」が40（78.4%）にのぼった。特に友人たちとの遊びの思い出は色褪せることなく記憶に留まっているようである。自然環境に恵まれた農山村地域は彼・彼女たちにとっても格好の遊び場になっていたのであろう。友人・遊びに関する「楽しい思い出」のエピソードの例は以下のとおりである。

- ・山や川で自由に遊べた。〔55年卒・男〕
- ・良い友達があった事（今でも電話、手紙等）。〔55年卒・女〕
- ・小川を飛び歩いた冬、そり。夏は川での水泳。〔55年卒・男〕
- ・友人の輪がとても深く上下がなかった。〔55年卒・女〕
- ・友達と話したり笑ったり友はいいものでし

た。〔60年卒・女〕

- ・友達がたくさんいたので毎日が遊び々々（遊び）で楽しかった。〔65年卒・女〕
- ・帰りに川原で水泳をした。〔65年卒・男〕
- ・男女差別なく友達がたくさんいて、毎日が楽しかった様な気がします。〔65年卒・女〕

しかし、初めて直面する複雑な人間関係に悩むようになるのも思春期に当たる中学生の特徴であろう。ネガティブな思い出としては少数ながらも「いじめ」に関する記述内容が5点確認された。「中学校よりK町に転校してきたので、注目されたせいか、いじめられた」〔60年卒・女〕や「成績の悪い子がいじめにあっていた」〔60年卒・女〕に見るように、転校生や成績の悪い子など教室のなかで弱い立場にあった子どもがいじめの標的になっていた様子が窺える。このほか「電気が通っていない家に住んでいた友人がいたこと」〔55年卒・女〕を「悲しい思い出」として記述した者もいた。これは、1950年代当時のK町・N村の厳しい経済状況を窺わせるエピソードである。

(3) 学校行事・部活動・生徒会

学校においては学業以外に学校行事、部活動、生徒会などの「特別活動」の時間が設けられている。これら特別活動についてもポジティブな印象に残った思い出として回答している割合が高い（61.5%）。「楽しかった」とする主な学校行事は主なところで修学旅行、学芸会、運動会、野外活動（八ヶ岳登山や霧ヶ峰への旅）などが挙げられている。このほか部活動やクラスマッチ（クラス対抗別の学校行事・活動）などを挙げた者もいた。

- ・スケート競技で数々の勝利を得たことと仲間との思い出。〔60年卒・女〕
- ・クラス全員力合せ全校音楽大会した時。クラス全員力ひとつに出来た時。〔65年卒・女〕
- ・部活動の友達と頑張れたこと。〔65年卒・男〕

- ・小さな学校規模であったため、何をしても全校単位で取り組んでいたことが、今では楽しく思い出される。〔65年卒・男〕

他方、同じ学校行事でも、人によってはネガティブな思い出として回顧するようである。

- ・八ヶ岳登山で長時間歩いたこと。〔55年卒・男〕
- ・クラブ活動の練習がハードであった。〔60年卒・女〕
- ・部活動の冬の合宿。〔65年卒・女〕

このほか、生徒会活動においては、「生徒会の役ができなかった（役にありつげなかった）」〔60年卒・女〕や「朝の朝礼 立っている時、話が長くて又かと思った」〔65年卒・女〕など、今も昔も変わらないエピソードがネガティブな思い出として記述されていた。

（4） 教師－生徒関係

当時の教師－生徒関係については、14のエピソードが確認された。そのうち約半数の6エピソードが「楽しかった思い出」として、残り8エピソードが苦・悲・嫌などのネガティブな思い出として記述されていた。

楽しかった思い出に共通するのは、やはり教師との関係が良好であったエピソードであろう。たとえば、「担任の1先生と話すこと」〔55年卒・男〕、「教員特に担任との仲が良かったこと」〔55年卒・男〕、「先生方に気に入られていた」〔60年卒・女〕であった。

他方、それとは対照的に、ネガティブな思い出として記述されているのは、教師との良好な関係が築けなかった場合である。なかでも教師による一部の生徒の特別扱いは批判の対象に挙げられている。「先生がエコヒイキをしたこと」〔55年卒・男〕、「担任の性格差別があった」〔65年卒・男〕、「先生と生徒の関係で、一部の生徒が特別扱いされていたこと」〔70年卒・男〕。

教師－生徒関係が「楽しい思い出だった」と答えた上3名は、「中学校時代の成績はよかった」（自己申告）、しかも中卒後に「進学校に進

学している」点で共通している。他方、教師との関係に対してネガティブな思い出を記述した3名は、「中学校時代の成績はよかった」点で共通するものの、中卒後、高校ではなく専門・各種学校に進学している。

（5） 通学

通学関係のエピソードは総計23であった。楽しかった思い出は「元気で学校に行けたこと」〔60年卒・男〕を除き、残り22はネガティブな思い出として記述されていた。

- ・毎日片道5 kmの道を通学した事。〔55年卒・女〕
- ・通学路が4キロ以上あったこと。〔60年卒・女〕
- ・片道7 kmの通学の困難さ。〔60年卒・女〕
- ・片道1時間半。おなかがすいたこと。〔65年卒・女〕
- ・片道に時間がかかったこと（片道80分位）。〔65年卒・女〕
- ・バスケットの練習の後、1.5時間かけて歩いて帰る事。〔70年卒・男〕

K町・N村の中学校については、K町に2校あった中学校が1960年に1校に統合され、N村に1校あった。さらに、N村の中学校が79年にK町の中学校に統合され、さらに現在では別の一村を加えた1町2村の組合立中学校として運営されている。学校の立地と町内・村内に散在する集落との関係から、なかには徒歩による遠距離通学を強いられた生徒も少なくなく、交通の不便さに加えて、通学に大変苦労した様子が窺える。

4. 「家族に関する思い出」の内容分析

学校に関する思い出に続いて、家族・家庭の思い出を分析・考察しよう。ここでは、さらに思い出の内容や対象から、① 家族成員・親族などに関する思い出、② 家族の経済的状況に関する思い出、③ 家事手伝いの思い出の3つに分類したうえで、考察を行った。

家族に関する思い出全般についていえば、58

エピソードのうち「楽しかった思い出」として記述されたのはわずか2エピソードに過ぎなかった(3.4%)。残りの56エピソードはネガティブな思い出であり、以下記述された内容とその背後にあるものから、当時のK町やN村の様子を明らかにしよう。

(1) 家族成員・親族

家族成員・親族の思い出は19エピソードを数えたが、そのうちポジティブな思い出として語られたのは2エピソード「両親姉弟いっしょで心配事がなかった」〔60年卒・女〕および「東京の叔母のところに行ったこと」〔55年卒・男〕に過ぎない。

残り17の思い出の多くは、家族成員(特に父・母)の逝去や不在などに伴う「悲しい思い出」や「嫌な思い出」などネガティブな思い出として回顧されている。例を挙げると以下の通りである。

- ・父親がいなかったこと。〔55年卒・男〕
- ・生母が幼少時逝去 母親への甘えや、愛情が貧しかった事。〔55年卒・男〕
- ・養女であることを親が話してくれなかったこと。〔55年卒・女〕
- ・中1の夏父が他界したこと。〔55年卒・男〕
- ・親に死なれ、愛情不足。〔60年卒・女〕
- ・母がいなくて部活ができなかった。〔65年卒・女〕

その一方で、「母が再婚して下に妹弟が出来たこと」〔55年卒・男〕や「兄弟が多かったこと」〔55年卒・男〕をネガティブな思い出として記述する者もいた。このほか、「家庭内にアルコール中毒者がいて、毎日あばれており、自分が止め役であったこと、勉強を夜家でしたかった」〔70年卒・男〕というのもあった。つまり、家族成員が増えたからといって、それは必ずしも本人の幸福を意味しなかった。これら家族のエピソードはそう遠くはない過去の出来事であるが、当時の農山村の家族の生活状況を察するに余りあるエピソードである。

(2) 家族の経済的状況

家族の経済的状況については17のエピソードが確認されたが、ポジティブな思い出として語られたエピソードは皆無であった。「生活苦」〔55年卒・男性〕〔55年卒・男性〕〔55年卒・女性〕〔60年卒・男性〕、「お金がなかった」〔60年卒・女〕や「家は現金収入が貧しく、親に無理がいえなかったこと」〔55年卒・男〕などに見られるように、当時のK町・N村は経済的にかなり厳しい状況であった。

それは子どもたちの学校生活や学習環境にも甚大な影響を及ぼしていたようである。たとえば、「貧しかったので教科書等が買えなかったこと」〔55年卒・男〕、「貧しく、したいことも出来なかった。学級費も大変だった」〔60年卒・女〕、「暮らしが豊かでなく学校での必需品も買ってもらえなかった」〔60年卒・女〕などに見られるとおりである。彼ら・彼女たちはこうした経済的な苦しさをネガティブな思い出として捉えている。

55年体制が誕生した翌年の『経済白書』における「もはや戦後ではない」は、日本が敗戦から立ち直り、高度経済成長期に突入したことを示す有名なフレーズである。しかしながら、同時期の農山村では、思い出の記述内容に見る限り、経済的に厳しい生活が続いていたのである。これは、思い出という主観のレベルで見ても、高度経済成長期における経済発展の地域間格差を如実に示している。

また、自由記述の属性を見る限り、経済的な苦しさをネガティブな思い出として語った17名の属性は主に55年卒・60年卒に偏り、65年卒においては1エピソード確認されただけ、70年卒に至っては家庭の経済的な問題を挙げる者はポジティブ/ネガティブを問わず誰一人としていなかった。この結果から、時代を経るにつれて、農山村の経済的状況が次第に好転していったと推察できる。

(3) 家事手伝い

中学生当時の調査対象者は家事手伝いの貴重

な労働力として期待されていたところも大きかったと思われる。家事手伝いについては、21のエピソードが確認されたが、先の家族の経済的状況と同様、すべてネガティブな思い出として記述されていた。

家事手伝いの内容は、農作業（畑仕事、田植え、麦刈りなど）、薪背負い、弟や妹の世話などが挙げられる。これらの家事・家業は、学校が休日のときに（ときには平日に学校を欠席させられてまで）親に代わって、あるいは親の手伝いとして、子どもが従事していたようである。しかも、これらの仕事は本人の意思に反して強いられた場合も少なくなく、したがって「ネガティブな思い出」として記述されたものと思われる。

- ・農作業、（夏休み等盆日以外毎日手伝われた）。〔55年卒・男〕
- ・下の妹のお子守りをしながら勉強をしたり絵を描いたこと。〔55年卒・女〕
- ・弟、妹の子守で遊べなかった事。〔55年卒・男〕
- ・日曜日の度に畑仕事や弟・妹の子守させられた他多数。〔60年卒・男〕
- ・学校が近く脱穀とか蚕あげには親が学校へ迎えに来る事。〔60年卒・女〕
- ・日曜日でも家の手伝いで友人と遊べなかった。〔65年卒・女〕

いずれにしても、こうした「家事手伝い」を思い出として記述しているのは65年卒業生までに見られるものあり、70年卒業生においてはこうした記述内容はみられなかった。このことは、K町・N村の産業構造の変化〔表4〕に伴う地域経済の好転や生活水準の向上、あるいは、農業技術の機械化・省力化などに伴って、

表4 K町・N村の「農林漁業」従事者の割合

	K町	N村	合計
1955年	67.7%	84.0%	74.1%
1960年	58.4%	74.1%	61.4%
1965年	52.9%	67.9%	55.7%
1965年	46.4%	56.2%	48.2%

（資料）国勢調査・各年度版。

農業の手伝いなどの家事には関わらなくなる（関わる必要がなくなる）子どもの出現を意味する（広田1999）。

5. 「その他の思い出」の内容分析

（1）地域社会の思い出

地域社会の思い出は総計12で、そのうち「楽しかった思い出」が9、「苦しかった思い出」2、「嫌だった思い出」1を数えた。

地域社会の楽しい思い出は豊かな大自然との関わりである。たとえば、「自然が豊かだった」〔60年卒・女〕、「大自然と共存していたこと」〔55年卒・男〕が挙げられる。「学校の裏山に登った事、千曲川で泳いだこと、川原が懐かしいです」〔55年卒・女〕や「食スル草木を知りえた事」〔65年卒・男〕が楽しい思い出として蘇ってくるのだろう。

このほか、地域の活動・行事を楽しい思い出として述懐する者もいた。数例を挙げれば、「村民運動、かあがり」〔55年卒・男〕、「甲組合の行事」〔60年卒・女〕、「町内マラソンとか行事が多かった」〔65年卒・女〕。

他方、「苦しい思い出」には「深沢から松の植林に行った時（土の中は凍っていた）」〔55年卒・女〕や「甲組合の陸上練習」〔60年卒・男〕が挙げられていた。K町・N村のいずれにしても地域共同体（村落共同体）の紐帯が強いがゆえに、地域の行事や活動も半ば強制的なものが少なかったのだろうと推察される。

「嫌な思い出」については、「O地区に住んでいたことで、差別的なことを言われた。今、考えれば文化的にも恵まれたいい所に住んでいたのに……」〔65年卒・女〕が挙げられた。K町のO地区は旧来の伝統を重んじる保守的な地域であると言われることが多く、それが原因で差別的なことを言われたのかもかもしれない。

（2）自分自身について

中学生時代の自分自身の事柄について、「思い出」として記述されたエピソードは7点確認された。ただし、「楽しかった思い出」として

記述されたエピソードは1点もなく、むしろ、自身の性格のあり方を問題視するような記述がやや女性を中心に目立った。以下のとおりである。

- ・自己表現がにが手だった。〔55年卒・男〕
- ・性格的に人の中に入って行けなかった事。〔60年卒・女〕
- ・心にゆとりがなかった。〔60年卒・女〕
- ・積極的に行動できなかつたこと。〔65年卒・女〕
- ・今思うと自分の感情を押し殺して学生生活を送っていた。〔65年卒・女〕

以上は自分自身の性格や内面を問題視した記述であるのに対して、「病氣」〔55年卒・男〕や「からだを少し悪くした」〔60年卒・男〕など自分自身の健康面で問題を抱えていた者もいた。

6. 結 論

本研究は、高度経済成長期に、長野県の農山村地域 K 町・N 村において中学校生活を送った卒業生の「思い出」の記述内容を通して、一地方の農山村地域の時代状況や生活実態とともに、それらに対する生活者としての見方や考え方など主観的な要素についても分析・考察を行った。

回答者の中学校時代の思い出を総覧すると、ポジティブな楽しい思い出が「学校」、なかでも「友人・遊び」や「学校行事・部活動」に関するものに集中しているのに対して、ネガティブな思い出の多くは家族の、とりわけ経済的な問題に集中した。

ここから、高度経済成長期当時の農山村地域に暮らす中学生の多くが、家庭の経済的な厳しさを体験しつつも、恵まれた自然環境の中で、友人と豊かな人間関係を築きながら、楽しい学校生活を送っていたとみることができよう。また、多くの者が家族のネガティブな側面を回顧していることに注目するとき、学校という「居場所」が子どもたちを家庭における不幸（生活上の様々な困難）から、一時的であれ「保護」

もしくは「避難」させる役割を有していたと捉えることができるのではないだろうか。

さらに、いわゆる大都市圏域と地方圏域との間で、経済成長の進度のタイムラグが見られる一方、時代を経るにつれてそうした地域的な格差の縮小とともに、思い出の記述内容が卒業年度（世代）に応じて大きく変化している。高校進学率が上昇し始める時期、つまり未だ第一次産業（農林漁業）が主流だった時期に中学校生活を送った 55 年卒業生にとっては、高校に進学できなかったことや農業などの家事手伝いをネガティブな思い出として回顧している。他方、そのわずか 15 年後の、高度経済成長期を経て社会が成熟し、その影響が地方の農山村にも及び、生活水準が上昇した時期に中学校生活を送った 70 年卒業生にとっては、高校進学が多くの生徒にとって自明になりつつあったのだろう、高校進学に対するネガティブな思い出はほとんど見当たらない。また、農業従事者が減少するなど K 町・N 村の職業構造の明らかな変容に伴って、家事手伝いについての思い出は回顧の対象にさえ入っていない。

過去の学校の記憶として残っている中学校時代の思い出は、学校生活を通して体得した「学校知」や過去の身体化された学校での実践（pratique）を含めて、表象の領域のなかで独自に機能し、しかも無意識のうちに現在の行動領域に顕現化するものであろう（黄 2002）。本調査の対象者もまた、過去の思い出や記憶との「対話」を通じながら、現在の社会観・教育観を構成していると思われる。

今後は、同時期の都市部の中学生との比較を念頭におきつつ、中学校時代の思い出の内容と現在の社会観との関連性についての考察を課題としたい。それは、「高度経済成長期」なる時期を、明治以降の近代日本社会から連続する〈近代〉（modernity）の問題として捉え、そこから生まれた諸々の矛盾、たとえば近代合理主義、資本主義、官僚制、社会的格差（性・階層・地域間の格差や不平等）といった諸問題を批判的に考察しようとする志向性をもつものにほ

かならない。

〔註〕

- 1 本論文は、放送大学「地域の教育」研究会・編（2005 近刊）所収の「第 2 章 高度経済成長期における農山村出身者の生活体験と現在の教育観の構成」（岡崎友典・春日清孝・小針誠共著）の小針執筆部分「第 2 節 中学校時代の思い出」に大幅な加筆修正を加えたものである。
- 2 長野県 K 町は、長野県東部の M 郡の南方に位置し、西部に八ヶ岳連峰を臨み、南北に流れる千曲川に沿って帯状の平坦地に町の中心部が形成された、人口 6,000 人強の町である。町の中心部には JR 線や国道が通り、町の主要な交通路になっている。かつては高原野菜・花卉栽培、牧場経営を主体とした第一次産業が主流を占めていたが、最近ではリゾート開発が進み、人口の 44.9% が第三次産業に従事している。他方、N 村は K 町の東側に隣接し、村の面積の 9 割を山林が占めていることを生かして、林業経営を主要な産業としている人口約 1,000 人の自治体である。K 町・N 村の地域特性に関する考察は岡崎（1989）、岡崎・人見（1990）、岡崎（2000）に譲る。
- 3 ライフヒストリー研究における「作品化」とは、史資料を「調査者もしくは研究者の視点からみてそれなりに意味のあるまとまりをもったかたちにとまとめあげ」（水野 1986：167 頁）る作業を指す。
- 4 高度経済成長を対象に社会学の共同研究を行ってきた鈴木・中道（1997）によれば、共同研究者の間において高度経済成長期を肯定的に評価するか否かを巡る意見対立があり、主に肯定派は「地方出身・オールドゼネレーション」の研究者、否定派は「都会出身・ヤングゼネレーション」の研究者であったという（鈴木・中道 1997：i-ii）。
- 5 日本のみならず、1960 年代に福祉国家（大きな政府）を志向した欧米諸国は、学校教育の拡大を通じて社会の平等化を目指す様々な社会政策（米国のヘッドスタート計画やアフターマティヴ・アクションなど）を採用したが、いずれも失敗に終わった。この点についての詳細は荻谷（1995：第 2 章）を参照。
- 6 長野県外居住者 76 名は、東京都在住 21 名、

神奈川県在住 16 名、埼玉県在住 16 名、千葉県在住 7 名、愛知県在住 7 名、その他 6 名と、その多くが政令指定都市（大都市）を含む都・県に居住している。

- 7 Bourdieu, P (1979 = 1990 訳) は、質問紙調査における無回答を、社会層ごとの意見生産のプラティック (pratique) として把握することによって、標準化された質問紙調査が抑圧させ、沈黙させてしまう「声なき人々」(=社会的権力の小さな人々) の存在を明らかにしている。また、日本の社会調査においてこの無回答者の属性と「沈黙させる」権力関係を実証的に明らかにしたものとして、北條 (2003) があ
- 8 なお、「その他」の記述 2 点については、中学校時代の思い出として記入されたものではないと判断されたため、今回の分析の対象からは除いた。

〔参考文献・引用文献〕

- Bourdieu, P., 1979, *La Distinction: critique sociale du jugement*, Editions de Minuit. 石井洋二郎 (1990 訳) 『ディスタンクシオンⅡ：社会的判断力批判』藤原書店。
- Blumer, H., 1939, *Critiques of Research in the Social Sciences: I: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's The Polish Peasant in Europe and America*, Social Science Research Council. 桜井厚 (1983 訳) 「社会科学における調査研究批判 I ——トーマス、ズナニエツキ共著『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』の評価」『生活史の社会学』御茶の水書房 169-241 頁。
- 広田照幸 (1999) 『日本人のしつけは衰退したか「教育する家族」のゆくえ』講談社現代新書。
- 北條英勝 (2003) 「社会調査における無回答から声なき人々の社会分析へ」宮島喬・石井洋二郎 (編) 『文化の権力 反射するブルデュー』藤原書店 43-63 頁。
- 放送大学「地域の教育」研究会・編 (2005 近刊) 『高度経済成長期における農山村の新規卒業者の「生活体験」に関する調査研究報告書 ——長野県 M 郡 K 町・N 村の中学卒業生の追跡調査——』(研究代表者・岡崎友典)。
- 金子元久 (1990) 「政策科学としての教育社会学」

- 日本教育社会学会・編『教育社会学研究』第47集 東洋館出版社 21-36頁。
- 荻谷剛彦(1995)『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等神話の戦後史』中公新書。
- 加瀬和俊(1997)『集団就職の時代』青木書店。
- 香西泰(2001)『高度成長の時代』日本経済新聞社(日経ビジネス人文庫)。
- 正村公宏(1988)『図説 戦後史』筑摩書房。
- 水野節夫(1986)「生活史研究とその多様な展開」宮島喬・編『社会学の歴史的展開』サイエンス社 147-208頁。
- 村瀬洋一・阿部晃士・中野康人・海野道郎(1995)「ごみ処理施設建設政策への仙台市民の政治参加行動——自由回答形式非定型データの計量分析」『日本文化研究所研究報告』東北大学文学部日本文化研究施設 別巻第32集 37-51頁。
- 岡崎友典(1988)「『地域と教育』研究(その3) 青年の地域間移動と地域定住」『放送大学研究年報』第6号 放送大学教養学部 77-100頁。
- 岡崎友典・人見麗子(1990)「農山村における地域定住の条件」『武蔵大学人文学会雑誌』21巻 第3・4号 放送大学教養学部 142-183頁。
- 岡崎友典(2000)「家族・親子関係と世代の交代——地域間/世代間の交流——」『家庭・学校と地域社会——地域教育社会学——』放送大学教育振興会 56-69頁。
- 鈴木正仁・中道實 編(1997)『高度成長の社会学』世界思想社。
- Thomas, W. I & Znaniecki, F., 1918-1920, *The polish peasant in Europe and America*, Richard G. Badger. 桜井厚(1983訳)「ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民」〔抄訳〕『生活史の社会学』御茶の水書房 1-168頁。
- 黄順姫(2002)「記憶のなかの学校」竹内洋・編『学校システム論 子ども・学校・社会』放送大学教育振興会 138-150頁。
- 吉原直樹(2004)『時間と空間で読む近代の物語』有斐閣。